

4. 「慶應幼稚舎」で学ぶ源之助と横浜・清水屋

幕末から維新への動乱の館山藩領にあった根本村において、1867（慶応3）年、金澤屋の清三郎（22歳）たよ（18歳）夫婦に長男源之助が生まれた。幼少期の源之助の姿は不明であるが、明治の根本小学校を卒業すると1880（明治13）年に慶應義塾幼稚舎に入学し、さらに慶應義塾に併設された商法学校に2年間在学している。福沢諭吉の建学の精神に賛同する政財界や官僚の豊かな家庭の子弟が多く、英語や外国史など先進的なカリキュラムをもった教育を実践していた。しかし、創立したばかりで運営は厳しく、高額な学費や寄付金に頼っていたようである。混乱が続く激動の時代にあって、長男には質の高い実学を身につけさせたいと思ったのであろうか。と同時に、源之助から11月15日付書簡【16】には「…横浜清水屋より先日金員着任候…」と、横浜・清水屋からの金澤屋の売上金が学費になっており、清水屋と貿易品の商取引に関わっていくには、様々な学びが必要だと源之助に感じさせたかもしれない。

13歳という多感な年齢に親もとを離れて上京し、幼稚舎3年と商法学校2年の計5年を寄宿舎で過ごし、さまざまな仲間たちと交友を深めたと思われる。在学中の源之助が父に宛てた書簡【36】には、「当校来る二十日より大試業ニて、予輩毎夜十時過迄勉強致し居り」と頑張っている様子を伝え、11月15日付書簡【16】では、「…来月より英書スウテントノ萬国史に相成候也…」とあり、学んでいた英語や培った人脈が、後の渡米時に活かされただろう。

慶應義塾幼稚舎に入学するにあたって、源之助の保証人であるとともに、その後金澤屋の仕事を継いでいく源之助を支援していた吉村勝郎という人物がいた。現在まで吉村からの書簡は確認されていないが、源之助より清三郎宛の11月15日付書簡【16】では、「…横浜清水屋より先日金員着任候間、吉村より受取早足（速）両校へ上納仕候、又先月御出京之折申上候書物購求■事、吉村より金式円程〔欠損〕仕候間、吉村へ御返金■〔欠損〕商業学校ニて試…袴入用の事〔欠損〕何卒至急御送…又被申着物吉村ニて者裏など仮ニ致し候…」と、吉村は金銭の収支をはじめ学生生活全般の面倒を見ていたようだ。明治18年に亡くなっている森惣右衛門から清三郎宛への書簡【288】には「…此俳諧本之義、吉村江御届ケ被下度、御願□（申カ）上候、源之助義□□（如何カ）御座候哉、御伺申上候…」とあるので、吉村と森惣右衛門が俳諧に関わって懇意であった可能性もある。書簡【366】をみると「…本人義本塾へ移り度由、先日書状ヲ以テ申来り、其文ニハ、私義年も十六才ニモ相成候間本塾へ移り度、相成べくハ吉村様方通へニ仕度、トノ事迄申遣され候間、其義ハ何レ土用休ミノ節相談可仕ト、返書遣シ置候得ども、忝入塾中ハ御尊君ニ於テ万事よろしき様御取斗へ可被下候様…」とあるので、吉村は清三郎から依頼され、関係者の子息の慶應義塾の幼稚舎入舎や入塾のために動いていた。

そして、5年間の学業を終えた源之助が新潟で不可解な行動を起こし音信不通となっていた明治19年、清三郎は源之助宛てに書簡【33】を出している。そこには「…吉村へ対しても行先ニヨリ手紙をハ出ス…」ようにと、わざわざ吉村の名前を出して源之助に釘を刺しているところを見ると、親代わりの役割を果たしていたのだろうか。また、1880年代の「松方デフレ」期の激変する経済状況のもと、自由民権運動や政治的な動きも激化するなかで「福沢先生に相頼みて満三カ年も入塾いたさせ」「満五ヶ年モユーマーナル学校ニテ多クノ御人ト交際致シタル事故、何レノ地ニカ商法ノ手続キ等致し居ル事ト、後日ヲタノシミニ」と述べ、福沢諭吉に直接依頼して入学したにもかかわらず、親の気持ちにこたえない19歳の息子を嘆き叱責している。不可解な行動の背景は不明だが、その後は親の忠告に従い、簿記学校（東京学館）に通って簿記資格をとり、金澤屋の営業に携わっていったのである。

清三郎が「…学校ニテ多クノ御人ト交際致シタル事…」という人びとはどうであったか。源之助が入学した1880（明治13）年の名簿が『稿本 慶応義塾幼稚舎史』（1965（昭和40）年）にあるので、わかる範囲で著名な人物をあげると、「明治13年（5～7月）／第1番（10名）早矢仕四郎（明治8年入学12歳）父有的は丸善創業者で長男四郎はハヤシライスの考案者。黒田長成（明治11年入学15歳）父第12代福岡藩主長知、長男で家督相続し幼稚舎入学、貴族院議員。／第2番（14名）福澤阿三（福澤諭吉の長女14歳）・第3番（15名）に小谷源之助（明治13年入学14歳）の名前。佐久間（後に武藤）山治（明治13年入学15歳）卒業後渡米し苦学、帰国後に武藤家の養子となりジャパン・ガゼット社に翻訳記者として勤務、後藤象二郎の秘書ともなって大同団結運動にも参加、1893年三井銀行に入り神戸支店副支配人。／第4番（14名）廣澤金次郎（明治12年入学10歳）首相秘書官、スペイン兼ポルトガル特命全権公使、伯爵、貴族院議員を歴任。」とある。

清三郎が源之助宛ての書簡【33】で重ねて訴えているのは、1887（明治20）年に徴兵検査を控えている源之助に、金澤屋経営の窮状を伝えることであった。そのことでは源之助から清三郎宛に書簡【7-2】を出し「尊父今商業之為失敗を言ひ、彼此御痛心の場合として、学問に志し賜ひ、手本御送り被下候事ハ、実に有り難く存候」と心機一転した心情を述べている。また「先般布良校に於て大試業之処、優等いたし候間、御安心被下度候、根本校に居り候へ共」といっているので、地元根本に帰って、布良校で小学校教員の授業生になる試験を受けたのだろうか。その際に根本校に行きたいと思っていたが、1887（明治20）年2月に錦織庄之助校長が辞職したと聞いて残念がっている。

ところで、源之助が慶応義塾幼稚舎に在学中、潜水器採鮑漁業が急速に広がり、鮑生産が高まった。当時、海産物取引に対する乾鮑製造や貿易品として品質が問われ、明治10年代中頃から清国貿易に関わる洋銀相場などもあり、横浜の海産物取引での売込商人の存在は大きかった。横浜の海産物商である清水屋から金澤屋宛に出された取引に関わる書簡が12通ある。いずれも年月が未詳であるが、金澤屋の海産物取引の姿を清水屋とのやり取りから紹介したい。他の書簡にも清水屋のことが書かれているが、後述する海産物商人辻孝助との取引では残っている勘定書関係がないので、取引内容や年月が不明である。清水屋に関わる他の書簡などと比較検討して、輸送状況や乾鮑取引の様子、とくに洋銀相場の動きや、金澤屋と清水屋の清国向けの乾鮑や貝殻の取引などの状況にふれてみたい。

まず、清水屋誠次郎から清三郎宛ての年未詳11月13日付書簡【104】をみると、清水屋の輸送形態が「…本月十二日正午十二時頃、館山蒸気舟乗込候間、同午後九時頃横浜表着致し候…」とあり、館山港を出発した館山蒸気船は9時間かかって横浜港に着岸している。館山と東京を結ぶ蒸気船が就航したのは1878（明治11）年である。館山町の辰野安五郎は、東京の魚問屋の資本で安全社を創業し、汽船通快丸を就航させた。安全社の独占的な事業経営の弊害をみた正木貞蔵は、1880（明治13）年に自ら船形村に北条汽船を設立し、保全丸（200t）を運航させ、翌年には安房汽船会社と改称して、房州丸はじめ汽船3隻を就航させた。東京・館山間の直行便は5時間と今までにない速さとなり、安全社と運賃値下げ競争を繰り広げて大幅な値下げを実現させたが経営に失敗した。1887（明治20）年に株主を集めて再建したものの再び価格競争に陥り破綻していった。清三郎にとって横浜に向けての輸送問題では清国貿易と関わり、安い運賃や安全な海上輸送、輸送時間の短縮など様々な要望があったと思われる。なお、横浜港は明治前期において日本最大の貿易港で輸出額は、日本における全輸出額の60～70%を占め、輸入額も50～70%を占めていた。明治前期、主要な輸出品は生糸や茶、銅、そして海産物であった。

清水屋誠次郎から小谷たよ宛の書簡【58】では「…海路之事故、昨夜房州丸横ス賀港迄参候、北風

烈キ故相泊リ、小生共モ横ス賀へ昨夜泊リ候ニ付、本日横ス賀出帆致し、九時ニ案着仕候…」と、房州丸が輸送しており強風のときは安全のため横須賀に寄って宿泊している。「…貴家主人義、幣殿へ昨朝参り、昨午后五時ノ汽車ニテ東京表テへ出立…」とあるので、清三郎は鉄道をつかって先に横浜や東京で取引相場を検討し、相場が急に高値になると「…貴家ニ有之干鮑の（欠損）ハ稀ナル相場故、取急キ御積出しノ由…三日之朝貴家ヲ積出し…其日ニ者無相違館山蒸汽へ御積入無之而ハ、横浜ニテ五日売物ニ者不出来、乍併兼テ御案内之通り相場…」となり集荷の日時に追われることとなる。そこで「…近村之品多少共買入、積入被下度候…干上リノ義、三日迄ニ不間候節ハ生干ニテ宜敷候故、尠シモ多分御積入被下度候、猶右期日延引と相成候上ハ、旧暮ノ支那ニテ売物ニ不成故、多分直段相下リ候ト推察仕候…」と、少しでも利潤をあげるため売買条件の駆引きがおこなわれている様子が書かれている。前述の11月13日付書簡には「…干鮑之儀者、先日方相かはり無之候間、鮑貝殻之義も先日方も多分違無之候間、先鮑貝殻之義百斤ニ付、キカイ上物先六式〇位、アマ取物五八〇位致し候間、洋銀之義も壹円弍十七銭位日々高下致し候…」と、蒸気船で地元産乾鮑や鮑貝殻が館山港から横浜港に輸送されているが、横浜から清国に輸出する乾鮑価格は、「洋銀」での取引であったことかわかる。「…洋銀之義も壹円弍十七銭位…」とは洋銀1ドルの相場が1円27銭ということであろう。

高橋秀悦著『幕末の金貨流出と横浜洋銀相場』（日本評論社・2018年）などを参考にして「洋銀」の持つ意味を考えてみたい。洋銀とは、幕末時にメキシコ・アメリカ・香港等で鑄造された1ドル銀貨がアジアで広く流通し、日本ではこれらを「洋銀」と総称していた。日米修好通商条約では自国金貨と相手金貨の同量交換や銀貨と相手銀貨の同量交換という同種同量の原則を定め、「洋銀1ドル＝一分銀3個」の交換比率となり、幕府によりメキシコ銀貨の市場取引が公式に認められ、銀貨の需給関係等が反映し「洋銀（メキシコ銀貨）」の相場（交換レート）が決定されていった。横浜の貿易取引で洋銀相場が認められると、交換比率は時々相場で決まることになり、実際は「洋銀1ドル＝一分銀3個」は「35匁2分～35匁3分」であったが、洋銀相場で表すと「1ドル＝45匁」であり、洋銀相場よりも1ドルにつきおよそ10匁、すなわち「一分銀0.65（＝銀2朱6歩）」の差があったことで投機の対象となった。

その後、洋銀相場は「1ドル＝36匁」から「45匁」に相場がつくられるとともに、明治2年には「1ドル＝60匁」となり、外国との貿易取引の規模によって動いていった。横浜でもドルは投機の対象となり、日本の貿易商は一分銀とドルとの差を見て商品価格を上げ下げし、価格はドルにすることで損失を回避する防御策になったという。1871（明治4）年に政府は洋銀に対抗する貿易通貨として交換比率を洋銀1ドル＝円銀1円とする円銀を発行した。1877（明治10）年に入ってから洋銀相場は上昇していき、銀貨の値上がりは輸入品の価格や米の値上がりをまねきインフレになって政府の財源不足は深刻なものになっていったという。明治12年には洋銀相場が1ドルにつき1円27銭と30%近く変動し、翌年にはさらに高騰し続け、1円70銭台から1円80銭にまで上昇した。一時下落したものの洋銀相場が高止まりのなか、政府は洋銀の投機取引を抑制する目的で横浜洋銀取引所を設置し、手持ちの洋銀を売り出し市場操作をおこなうことで、洋銀価格の抑制に乗り出していった。明治18年の銀本位制成立にともなって洋銀相場が消滅するように動いたものの、貿易取引の通貨として機能は残った。とはいえ実質的に洋銀の役割は終わったのであった。

このような時代の流れのなかで、松方財政によるデフレ政策がおこなわれていくことになる。米価格などの農産物価格の下落により、農村が窮乏し自作農から小作農へ転落したり、都市に流入して労働者となったり、土地が地主や高利貸しへと集積されていった。このことで反政府的な暴動を

引き起こすようになり、また政商などは官営工場の払い下げにより大きく成長して財閥にむかっていき、資本主義経済の土台というべき、資本家と労働者の分離が急激に進んでいくことになる。多様な殖産興業の展開によって近代的な会社企業が勃興していったと同時に、従来の産業も刺激を受け、新しい産業とともに全体的に輸出は拡大していった。

清水屋誠次郎から清三郎宛への書簡【237】は、「…商館モ皆貝殻之義ハ、実事安気ノ見込…御地買入ハ百斤ニ付三円五錢位迄御買入被成候得ば、貴家も利徳ニ相成候間、夫レニ自今ハ切貝ニ致サナケレバ到底売込ニ不成候間、左ニ宜敷御承諾願上候、猶、貝殻之義、貴地品幣店仕切直段百斤ニ付横浜手取三円八十錢迄仕切相出し候、尤モ万孝へ余レハ三円五十錢五、余ハ更ニ買受不申候間、尤モ貴地ノ品モ砂取根ハ九十錢迄買受候間、左ニ御算当之上、御通送り（マヽ）被下度…」と、貝殻売買の相場とその駆引きが書かれている。

鮑貝殻は「石決明」と称して薬用でもあったが、貝の裏側が真珠光沢になっているので、薄く切り出し螺鈿細工などに利用する工芸材料でもあった。貝殻は極めて堅く、各種ボタンや様々な装身具などに用いられ、繊維産業の発達にともない欧米風衣装になっていくなかで洋服の普及や国策としての軍服には多様なボタンが使われ、貝殻は極めて重要な原料となった。ボタンが伝わったのは幕末から明治維新の頃であり、しばらくは輸入されていたが、その後国産化されるようになり、貝殻ボタンなどは輸出品になっていった。乾鮑の取引では清国の海産物商人が本国の売買をコントロールし相場変動で価格の乱高下があったが、鮑貝殻も輸出されていたものの、国内市場があったので価格の変動は少なかったと思われる。

1891（明治24）年5月21日付清水屋亀次郎書簡【140】では「…貝殻之事ニ而、後々迄茂控居候間も相わかり不申、無抛売渡候、百斤ニ付壱数五分安ニ御座候処、是又無抛売拂、此後ニ至高直の伝しんも有之候哉も斗りがたく候得共、何分時相場事ニ而、何卒此段御承入被下度、此後ニ高直ニ相成候節ハ、書簡手紙差上候…」と、貝殻の売込については相場の上げ下げがあるなか高値で売りたいが、その時の価格で売払うこともあるとの了解をもらっている。